



「最初は先輩とパートナーを組んで、2人で現場業務をこなしていたんですが、先輩が計画や施工協議等で忙しくなり、1人で現場を任されることが増えています」

図面を描いているだけでは
見えてこない、
それが現場の仕事

輝け! けんせつ小町

現場監督

宇田梨沙 ● 阪急淡路6工区工事事務所

職業も多様化が進み、かつては「男の世界」だった建設業界を目指し、入ってくる女性も増えてきた。今回紹介するけんせつ小町は、子供のころからの工作好きが高じて建設会社に入社し、土木の現場に勤める現場監督。4年間の内勤から現場配属となって約1年、その奮闘ぶりを聞いた。



輝く、わたしの姿
Shine



子供の頃からの「モノづくり」への思い

現場監督・宇田梨沙は、一九八七（昭和六十二年）、京都府舞鶴市生まれ。車の整備士をしていた親戚の影響で、自分の手を動かして何かをつくることに興味を持った。

「兄の影響でプラモデルに熱中したりとか、全然女子っぽくないんですけど（笑）、かわいいものよりもそういうカッコいい方にあこがれて」大学の進路を決める際には、「ビルとか家を建てるよりも、もっとスケールの大きなものをつくれると思って」、土木を専門に学ぶ「建設工学科」を選択した。

「現場見学で、開通前の高速道路の橋を大学

の研究室みんなで見に行ったんです。『こんなところ、現場で仕事して見ないと見られないだろうな、すごいな』って」

（株）鴻池組に入社後、四年間は設計グループで図面作成や耐震計算・構造計算に従事し、昨年からは現在の現場に配属された。

「採用される際に『施工管理』っていう枠だったので、いずれは現場に出るだろうと思っていました。でも図面を描いていた時は施工のことをうまくイメージできなかったのです、職人さんのやりやすさとか現場での見やすさを考えた設計にはなっていなかったと思います。上司に言われて直したりもしましたが、やっぱり現場に出て気づかされた部分が多いですね」

「女性らしさ」を前面に

現在、大阪の淡路駅付近で阪急京都線・阪急千里線を連続立体交差させる大規模な事業が進められており、宇田が勤務しているのはその八つある工区の一つだ。

「主な業務は週間工程表の作成や測量業務ですね。工種ごとに工程を決めているので、進捗状況の確認をしながら、測量を今日はここまでとか、今週中に絶対ここまでやらなくちゃとか、自分が描いた工程とにらめっこしながらやっています。この区間だけで一・二キロあるので、一日中測量していることもあります。他には工事写



一生懸命に
取り組むことで、
職人さんとの
信頼関係が築かれる

Profile

うだ・りさ◎1987(昭和62)年、京都府生まれ。徳島大学工学部建設工学科を卒業後、2010(平成22)年に(株)鴻池組に入社。大阪本店土木技術部に配属され、土木設計などに従事。2014(平成26)年より現在の現場勤務。工程表・施工図の作成や現場測量業務などを担当。

入ってきているので、先輩も職人さんたちもみんなわかってくれていて、こうした方がいいよとか、これわかっているか、みたいに親切に教えてもらってます」

大規模な現場だけに、毎日いくつもの資材や廃材の搬入・搬出がある。現場監督としては、全体を見渡した上で、効率よく無駄のないように差配するのが腕の見せ所となる。

「ある時、私が再生砕石の搬入を手配した翌日にコンクリートガラの搬出が予定されていた。職人さんに『ガラを搬出するときに砕石を積んで現場に戻せば効率がいいぞ』って指摘されて。ガラの搬出と砕石の搬入を同じ日にすれば、ダンプトラック一台で済んだんですね。そのとき初めて、前後の工程を考えずにその場の状況だけで砕石の搬入日を決めてしまったこ



左上/大阪市と阪急電鉄が協力して進めている連続立体交差事業。複雑に交差する二つの路線を、供用しながら移設・高架化する大がかりな工事だ(右に見えるのが仮設の線路)。

左下/かつては先輩と行っていた測量業務も、最近では宇田が後輩に指導する場面も増えてきた。

(提供: (株)鴻池組)

右/「工事現場なんて行ったことがなかったんで、職人さんは怖いとか、めっちゃ怒鳴られるとか言われてたんですけど、実際はすごくフレンドリーです(笑)」

わたしが伝える

Sender

真の撮影や施工図の作図ですね」

現場をまとめる(株)鴻池組・小野田憲一所長にとっては、初めて女性技術職員を受け入れることへの戸惑いもあった。

「この現場にとっても初めての女性技術職員だったのですが、最初は『どうしたものかな』と。実は他工区の所長に相談したりしていました(笑)。女性用の更衣室とトイレはもともと完備していたので、現場業務がこなせるかどうかだけが心配でした。いざ仕事をしてみたら、これが全くそんな色ない。コミュニケーションもよく取れるし、強面の職人さんもやさしくなったりしていねいに対応してくれたりで、現場の雰囲気が変わりましたね。さすがに腕力の違いはあるので、測量杭を打つのは難しそうですけど。十八歳の新人男性職員が『ちょっと休憩しましょう』って音を上げるくらい体力があって頼もしいですよ」

「現場では明示看板や注意喚起を促すような啓蒙看板を自作することがあるんですが、僕ら男性職員が作ると無骨なものになるので、彼女がつくるとちよっとした挿絵とかがあつてかわいらしくなる。こういうところが女性らしいな、と思いますね」

職人から学ぶ、現場での立ち回り

「最初から、現場経験ゼロですって宣言して

上／阪急淡路6工区工事事務所のメンバー。(提供: ㈱鴻池組)
左下／宇田が作成した、現場内の注意喚起看板。背景に写真を用いる点など、女性ならではの配慮を感じさせる。
右下／「技術部にいた時に地下トンネルの設計をやったんですけど、いずれはシールド工事みたいな大規模な現場も担当してみたいですね」



Shine & Sender

とに気づいて」

本来、元請会社の裁量は、職人の立場からすれば口を出しづらい領分かも知れないが、そこは宇田の成長を願った期待の表れだろう。

「やっぱり、職人さんたちは現場のことを熟知されています。そういう目線で見ると、って勉強になることばかりですね」

「無理」と言わずに築く人間関係

女性の社会進出、殊に建設業界の女性技術者の活躍が話題となっている中、女性現場監督による講演を聞きに行く機会があった。

「その時、『女性でも男性でも、一生懸命やっていたら誰でもついてきてくれる』という話をされていて。ふだんサボっていたり、いい加減にやってるような人では、いざやってほしい時に頼んでも誰も相手にしてくれない。確かにそれとおりがなあって。だから私も一生懸命やってとりあえず一言目に『無理です』っていうのを言わないでお願いします」

「これから現場で働く女性が増えれば、私たちももっと仕事をしやすくなるし、今みたいに珍しがられることもなくなると思うんで(笑)、少しでも興味を持っている人がいたら、自分の思うように進んでほしいですね」